

木造文殊菩薩坐像 国宝

文殊は大乗仏教における偉大な菩薩のうちの一人である。知恵を人格化した存在で、仏教の教えを体現し、その教えを伝え知らせるための経典の守護者としての役割を果たす。学びや教義の知識と強い関連性を持つことから、東金堂の文殊は、長年にわたって、興福寺の学僧たちから主たる菩薩として崇拝されてきた。高校や大学の受験に臨む学生たちもまた、文殊の助けを得ようと祈りを捧げる。

この像は、12世紀の最後の10年間に、おそらく定慶またはその他の慶派の仏師の手によってつくられたものだと研究者は考えている。檜の寄せ木造りで、水晶の目がはめこまれており、顔料と金箔による装飾が施されている。文殊は蓮華の台座に座り、その台座の下には獅子が丸くなっている。文殊は半跏の姿勢で座り、2つのメダルを組み合わせたようなかたちの光背がその背後にある。鎧の胸当てを身につけており、衣がその上にかかっている。衣や鎧の豊かでカラフルな装飾は平安時代（794～1185年）の後期のスタイルを思わせるが、全体としての像の見た目は12世紀の宋王朝の中国から輸入された仏像を基にしている。少年のような顔に、頭部には髪飾りをつけ、その上にはインド風の書物が載っている。これは、仏教の教えを守り伝えるという文殊の役割を表している。